

進学・在学理由の5類型と  
能力習得評定・学生生活充実度との関連

谷田 薫  
(関西学院大学総合教育研究室)

## 大学への進学理由と現在の大学へ在籍している理由（進学理由と在学理由）

関西学院大学総合教育研究室（総研）では、学生の意識や生活を知るためにカレッジ・コミュニティ調査（CCA 調査）を実施している。この調査は 1976 年に第 1 回の調査が実施されました。以降 2～3 年の間隔で継続的に調査が行われ、2006 年に第 14 回調査が実施され結果が公開されている。さて、この「Q1.1. 大学へ進学しようと思った理由（進学理由）」は、1976 年の第 1 回の調査から、また「Q1.2. 現在重視している理由（在学理由）」は 1979 年の第 2 回調査以降継続されている項目である。

この設問の選択肢は 15 と他の属性との関係を考える場合煩雑であり、CCA 基本報告書ではこれらを 5 つの類型に再分類して考察を行っているのでこのキャリア調査においても以下の 5 類型で属性や他の項目との関連を考察する。

教養型：「教養や視野の拡大」「立派な人格形成」

勉学型：「専門知識・技術の修得」「学問研究」

学歴型：「就職に有利」「就職に必要な勉強をする」「将来の安定した生活」「結婚に有利」

青春型：「青春を楽しむ」「課外活動にはげむ」

雷同型：「みなが行くから」「家族がすすめる」「先生がすすめる」「特に理由はない」\*

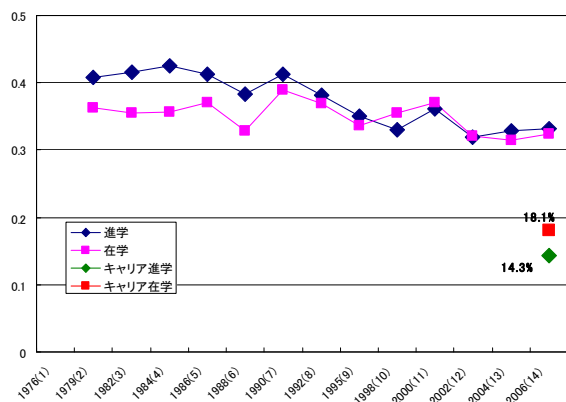
\* 従来の総研の基本報告書ではこの「特に理由はない」は雷同型に含めていない。

\*\* 今回用いた CCA データは「その他」と「無回答」をシステム欠損値として省いており集計の際の分母から省かれている。またキャリア調査についても CCA 調査との比較の際に「その他」を省いたデータを用いている。そのため各基本報告書と若干母数が異なっている。

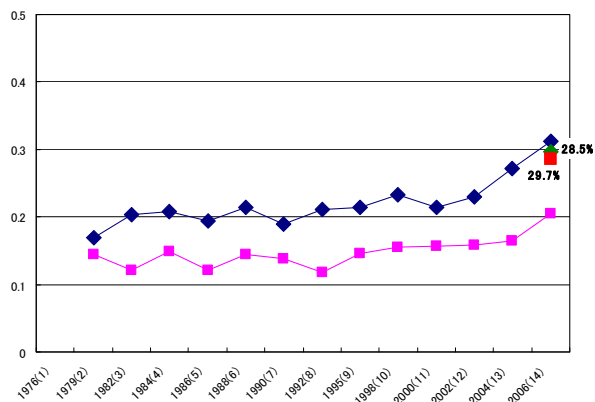
**図 1**（在学理由と同様にするために進学理由についても第 1 回調査のデータを省いて、以下同様）は、1979 年の第 2 回調査から 2006 年の第 14 回調査までの各類型における進学理由と在学理由の推移と、キャリア調査 2007 の全体の選択率を示したものである。

CCA 調査にみられる、類型毎の特徴は、「教養型」と「勉学型」においては進学－在学の間すべての調査回を通じて他の 2 つの類型に比べて差が小さい。一方、「学歴型」は進学理由が在学理由より選択率が高く、「青春型」では、逆に在学理由が進学理由より選択率が高くこの傾向は全調査回を通して一貫している。

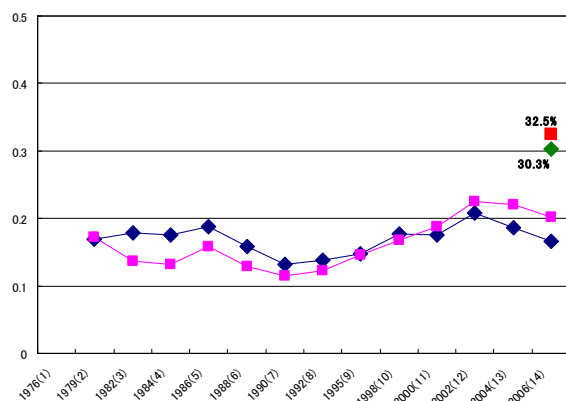
キャリア調査では、「教養型」ではやや在学理由が進学理由より高く、「勉学型」では在学理由より進学理由が高いがその差は CCA14 より小さい。「学歴型」では CCA14 での進学－在学の差が 12 ポイントであるのに対して、キャリア調査では 1.5 とほとんど差が無い。また、「青春型」でも CCA14 が 16 ポイント在学理由の方が選択率が高いのに対して、キャリア調査ではその差は 6 ポイント程度である。概して、「青春型」、「雷同型」以外ではキャリア調査の入学前後の差は小さい。また、「教養型」では進学理由、在学理由ともに CCA データより選択率は低く、「勉学型」では高い。「学歴型」では、キャリア調査の進学・在学理由ともに CCA14 進学理由に近い選択率になっている。「青春型」ではキャリア調査は、進学理由・在学理由ともに CCA14 の進学理由に近い選択率になっている。



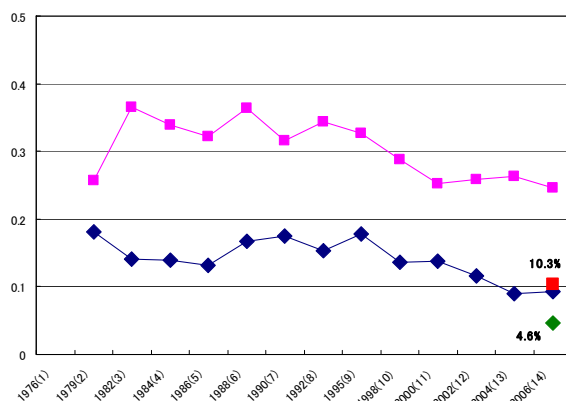
教養型



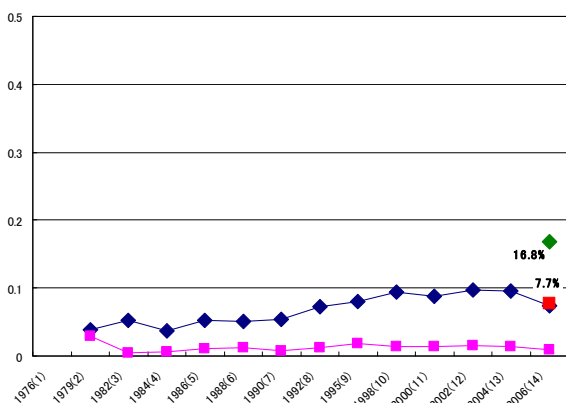
学歴型



勉学型



青春型



雷同型

図1. 5類型別の進学・在学理由の変化

では、進学理由と在学理由で差が小さい類型は、同じ人間が進学理由と同じ在学理由を持ち続けているのであろうか。両調査で、それぞれの類型毎に進学理由から在学理由へどのように遷移しているかを示したものが、**表1**（キャリア調査）と**表2**（CCA14）である。これは、横に進学理由を縦に在学理由をとったクロス集計表である。この表の同じ類型同士の重なり、つまり対角線のセルの度数は進学・在学理由ともに同じ類型を選択したものの数で、同じセルの「進学理由の%」は進学理由でその類型を選んだ総数に対する割合であり、その類型の歩留まり率に相当する。「進学理由の%」が「在学理由の%」より大きければ、その類型から出て行った以上に他の類型から遷移してきた者が多い事を示し、「進学理由<在学理由」となる。キャリア調査では、「勉学型」の歩留まり率が一番高く、進学理由「勉学型」の65%が在学理由でも「勉学型」を選んでいる。この類型の進学理由、在学理由の全体に占める選択率の差は2.3ポイントである。次に歩留まり率が高いのは、「学歴型」でこれはほぼ6割、進学理由、在学理由の差は1.5ポイントと5つの類型の中では最も差が小さい。次に歩留まり率の高い「青春型」は、進学理由の約半数がとどまっているが、他の類型からの移動も多く進学理由、在学理由の差が5.7と「雷同型」の9.6ポイントに次いで大きい。

**表1. 進学と在学理由の遷移率(キャリア調査2007)**

キャリア(全) N=1903		在学理由					合計
		教養型	勉学型	学歴型	青春型	雷同型	
進学理由	教養型 度数	139	65	47	26	8	285
	進学理由の%	48.77%	22.81%	16.49%	9.12%	2.81%	100.00%
	在学理由の%	39.38%	10.17%	8.38%	12.94%	5.37%	14.98%
	全体の%	7.30%	3.42%	2.47%	1.37%	0.42%	14.98%
	勉学型 度数	77	396	80	39	12	604
	進学理由の%	12.75%	65.56%	13.25%	6.46%	1.99%	100.00%
	在学理由の%	21.81%	61.97%	14.26%	19.40%	8.05%	31.74%
	全体の%	4.05%	20.81%	4.20%	2.05%	0.63%	31.74%
	学歴型 度数	77	119	333	55	6	590
	進学理由の%	13.05%	20.17%	56.44%	9.32%	1.02%	100.00%
	在学理由の%	21.81%	18.62%	59.36%	27.36%	4.03%	31.00%
	全体の%	4.05%	6.25%	17.50%	2.89%	0.32%	31.00%
	青春型 度数	10	11	22	46	4	93
	進学理由の%	10.75%	11.83%	23.66%	49.46%	4.30%	100.00%
	在学理由の%	2.83%	1.72%	3.92%	22.89%	2.68%	4.89%
	全体の%	0.53%	0.58%	1.16%	2.42%	0.21%	4.89%
	雷同型 度数	50	48	79	35	119	331
	進学理由の%	15.11%	14.50%	23.87%	10.57%	35.95%	100.00%
	在学理由の%	14.16%	7.51%	14.08%	17.41%	79.87%	17.39%
	全体の%	2.63%	2.52%	4.15%	1.84%	6.25%	17.39%
合計 度数	353	639	561	201	149	1903	
進学理由の%	18.55%	33.58%	29.48%	10.56%	7.83%	100.00%	
在学理由の%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	
全体の%	18.55%	33.58%	29.48%	10.56%	7.83%	100.00%	

## 表2. 進学理由と在学理由の遷移率(CCA14(2006))

CCA14(2006)N=969		在学理由					合計
		教養型	勉学型	学歴型	青春型	雷同型	
進学理由	教養型 度数	205	46	28	51	0	330
	進学理由の %	62.1%	13.9%	8.5%	15.5%	.0%	100.0%
	在学理由の %	63.9%	23.1%	14.0%	21.1%	.0%	34.1%
	全体の %	21.2%	4.7%	2.9%	5.3%	.0%	34.1%
	勉学型 度数	24	108	14	18	0	164
	進学理由の %	14.6%	65.9%	8.5%	11.0%	.0%	100.0%
	在学理由の %	7.5%	54.3%	7.0%	7.4%	.0%	16.9%
	全体の %	2.5%	11.1%	1.4%	1.9%	.0%	16.9%
	学歴型 度数	63	36	136	74	2	311
	進学理由の %	20.3%	11.6%	43.7%	23.8%	.6%	100.0%
	在学理由の %	19.6%	18.1%	68.0%	30.6%	28.6%	32.1%
	全体の %	6.5%	3.7%	14.0%	7.6%	.2%	32.1%
	青春型 度数	12	4	7	69	0	92
	進学理由の %	13.0%	4.3%	7.6%	75.0%	.0%	100.0%
	在学理由の %	3.7%	2.0%	3.5%	28.5%	.0%	9.5%
	全体の %	1.2%	.4%	.7%	7.1%	.0%	9.5%
	雷同型 度数	17	5	15	30	5	72
	進学理由の %	23.6%	6.9%	20.8%	41.7%	6.9%	100.0%
在学理由の %	5.3%	2.5%	7.5%	12.4%	71.4%	7.4%	
全体の %	1.8%	.5%	1.5%	3.1%	.5%	7.4%	
合計 度数	321	199	200	242	7	969	
進学理由の %	33.1%	20.5%	20.6%	25.0%	.7%	100.0%	
在学理由の %	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
全体の %	33.1%	20.5%	20.6%	25.0%	.7%	100.0%	

まとめると、キャリア調査の進学・在学理由歩留まり率は高い順に、「勉学型 (66)」－「学歴型 (56)」－「青春型 (50)」－「教養型 (49)」－「雷同型 (36)」であるのに対し、CCA14 調査では、「青春型 (75)」－「勉学型 (66)」－「教養型 (62)」－「学歴型 (44)」－「雷同型 (7)」となっており、「青春型」の歩留まり率の高さが目につく。CCA 調査について調査回毎に同様に類型毎の歩留まり率を求め平均すると、「青春型 (平均 74, 標準偏差 4.0)」－「教養型 (61, 3.5)」－「勉学型 (53, 8.2)」－「学歴型 (41, 5.7)」－「雷同型 (10, 6.1)」と「青春型」の歩留まり率が高いのは CCA14 と同じだが 2 番目以降は「教養型」と「勉学型」が入れ替わっている。ここで、「青春型」「教養型」ともに標準偏差が 4 と 3.5 と小さく、14 回の調査を通じて歩留まり率の変動が小さく、両類型とも進学理由での選択率が調査回毎に低くなってきているが、その歩留まり率はほぼ一定といえる。さらに「教養型」と「勉学型」は図 1 に見られるように、全調査回をとおして進学理由と在学理由の選択率にあまり差がない、つまり、この 2 つの類型の進学理由の 4～5 割が、別の在学理由へ移動しているにもかかわらずほぼ同じだけ他の類型から移動してきている事になる。「教養型」、「学歴型」に見られるこのような特徴が、CCA 調査の母集団である関西学院大学だけの特徴なのか、同じような学部構成の大学に同様に見られる傾向なのかについては、キャリア調査からは明らかにできない。

### (1) 学年による特徴

CCA 調査について、これら 5 つの類型毎に、1 年生と 3 年生、及び全学年の進学理由の推移を

図2に、在学理由の推移をと図3に示す。比較のために、キャリア調査の平均値を2006年に実施された第14回調査のデータと重ねて示している。

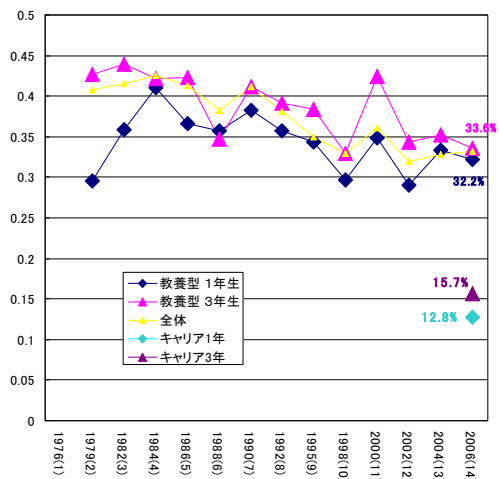
進学理由の傾向としては、「教養型」では、比較的一貫して3年生が1年生よりやや高く、「勉学型」、「学歴型」では1年生の方が一貫して高いが、その差はわずかである。キャリア調査では、進学理由類型の選択率に統計的に有意なさはみられなかった。しかし、CCA14については学年差が有意であった ( $\chi^2(4)=1017, p<.05$ )。

CCA調査の在学理由についてみると、「教養型」では進学理由と同様に3年生が比較的一貫して1年生より高いが3年生のデータは調査回によるブレが大きい。また「勉学型」「学歴型」ではあまり一貫した学年差は見られないが、CCA14データでは学年差が広がる傾向を見せている。「青春型」では一貫して1年生が3年生より選択率が高いが第10回調査以降その差が小さくなる傾向がうかがえる。また、「勉学型」以外の4つのタイプで、CCA14に見られる学年の大小関係はキャリアデータでも同様である。これらの学年差は両データにおいて統計的にも有意であった (CCA14; ( $\chi^2(4) = 12.03, p<.05$ ), キャリア; ( $\chi^2(4) = 14.45, p<.05$ ))。

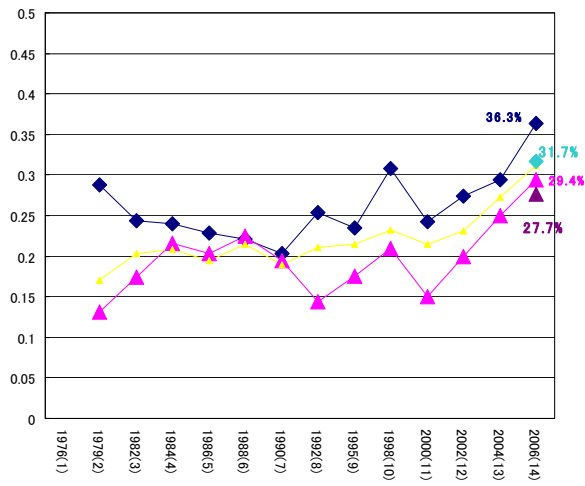
では、CCA14とキャリア調査で学年による進学理由の類型別の割合を比較する。CCA14では、1年生が「学歴型 (36.3%)」「教養型 (32.2%)」「勉学型 (19.2%)」、3年生が「教養型 (33.6%)」「学歴型 (29.4%)」「勉学型 (15.9%)」と1年生と3年生では1位と2位が入れ替わっている。一方キャリアデータでは1年生「学歴型 (31.7%)」「勉学型 (30.0%)」「雷同型 (16.7%)」、3年生「勉学型 (30.5%)」「学歴型 (27.7%)」「雷同型 (17.0%)」とこれも1位と2位が入れ替わっており、CCA14で選択率の高い「教養型」はキャリア調査では4番目である。またCCA14では一番選択率の低い「雷同型」がキャリア調査では目立って率が高い。

CCA14の在学理由では、1年生が「教養型 (29.4%)」「青春型 (25.9%)」「勉学型 (24.8%)」、3年生では「教養型 (35.5%)」「学歴型 (27.5%)」「青春型 (20.4%)」とここでは、2位と3位が入れ替わる結果となっており、1位の「教養型」の選択率の差が大きい。一方キャリア調査では、1,3年生ともに「勉学型 (1年生 33.2%, 3年生 31.8%)」「学歴型 (28.0%, 29.0%)」「教養型 (15.4%, 20.8%)」と1位と2位では学年差はほとんど見られず、3位の「教養型」で3年生がやや高い結果となっている。CCA14で選択率の高い「青春型」はキャリア調査では4番目であり1年生が11.5%、3年生が9.2%とそれぞれCCA14の半分以下となっている。

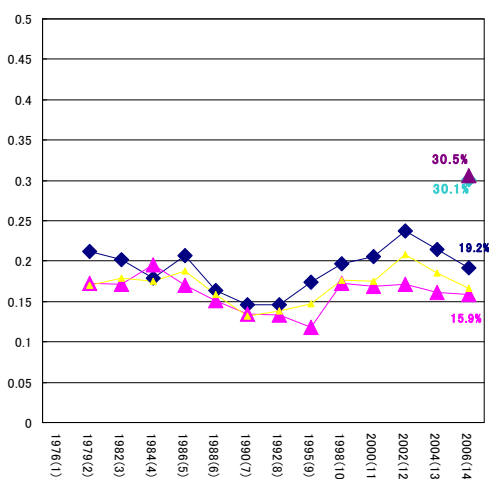
これを見るとキャリア調査に比べて、CCAデータでは進学理由・在学理由ともに「教養や視野の拡大」「立派な人格形成」といった教養志向が強く、在学理由では、「青春を楽しむ」「課外活動にはげむ」といった今を楽しむ傾向が強い。一方、キャリア調査では「専門知識・技術の修得」「学問研究」といった専門・学究志向が高い。またキャリア調査では、進学・在学ともに「雷同型」がCCA調査と比べると目立って高く、特に在学理由ではCCA14では1%程度になっているのに対しキャリアデータでは1年生で8.7%、3年生で6.7%と特に3年生で3年間在学しているにもかかわらず大学へ在学することに積極的な理由を見つけていない率が高い。このCCA調査の調査回毎の類型の選択率とその調査が行われた年度の大学進学率(文部科学省, 2008)との相関を見ると「進学理由・雷同型」と大学進学率には強い正の相関が見られる ( $r=.86, N=13, p<.01$ ) が「在学理由・雷同型」とは有意な関連は見られない。このCCA調査からは、大学進学率が高くなるにつれて「みなが行く」「先生や親のすすめ」「特に理由なく」といった理由で大学に進学してくる学生が増えてきているが、在学しているうちにそれぞれに何らかの在学理由を見つけていくと推測されるが、キャリア調査では積極的な在学理由を見出せないままの学生の率がCCA調査に見るよりは高いといえそうである。



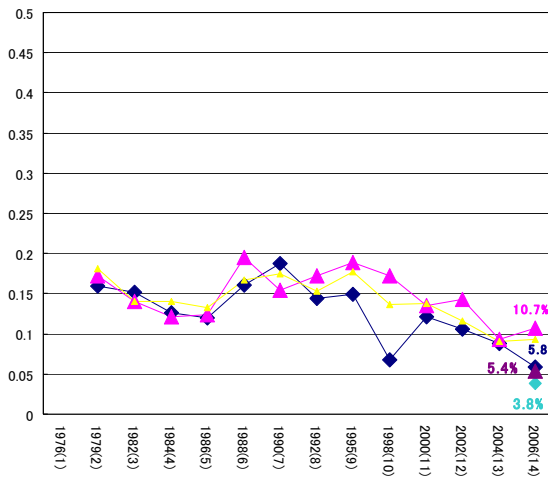
教養型



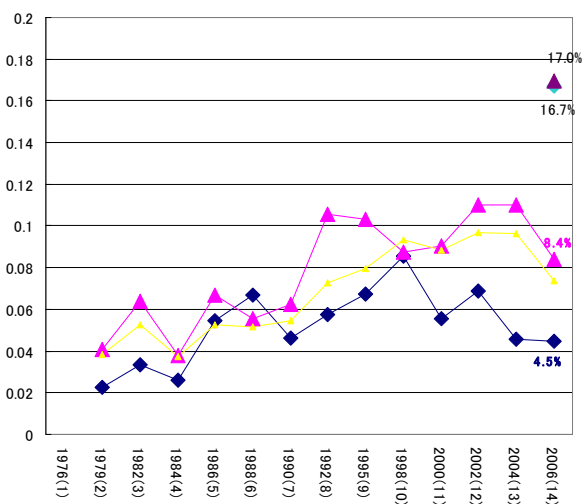
学歴型



勉学型



青春型



雷同型

図2. 学年別の各進学理由の推移

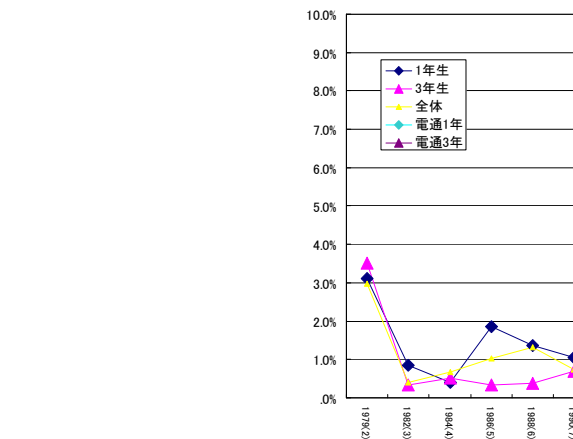
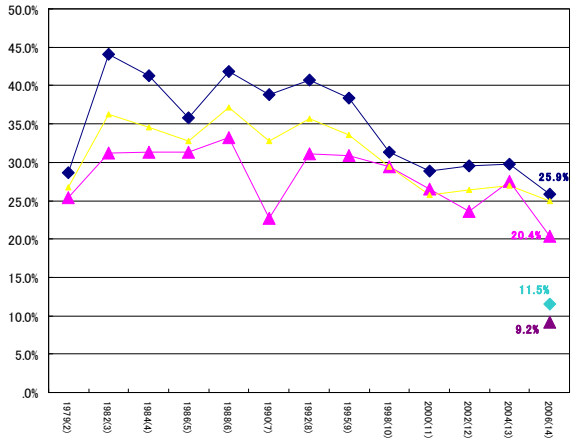
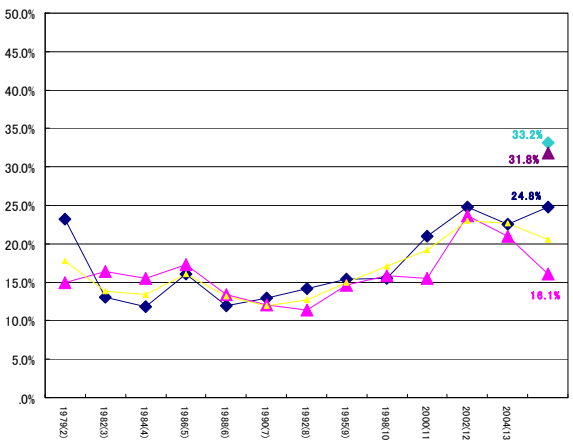
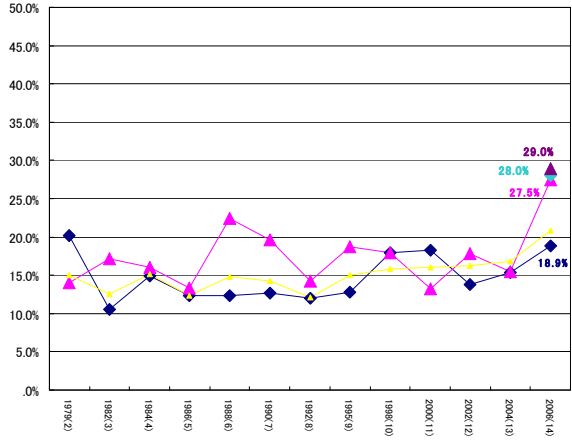
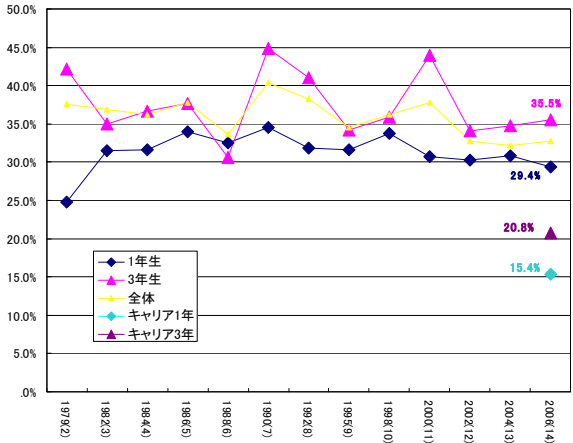


図3. 学年別の在学理由の推移



## (2) 男女による特徴

進学・在学理由の類型毎に、男女別の推移を図4、図5に示す。

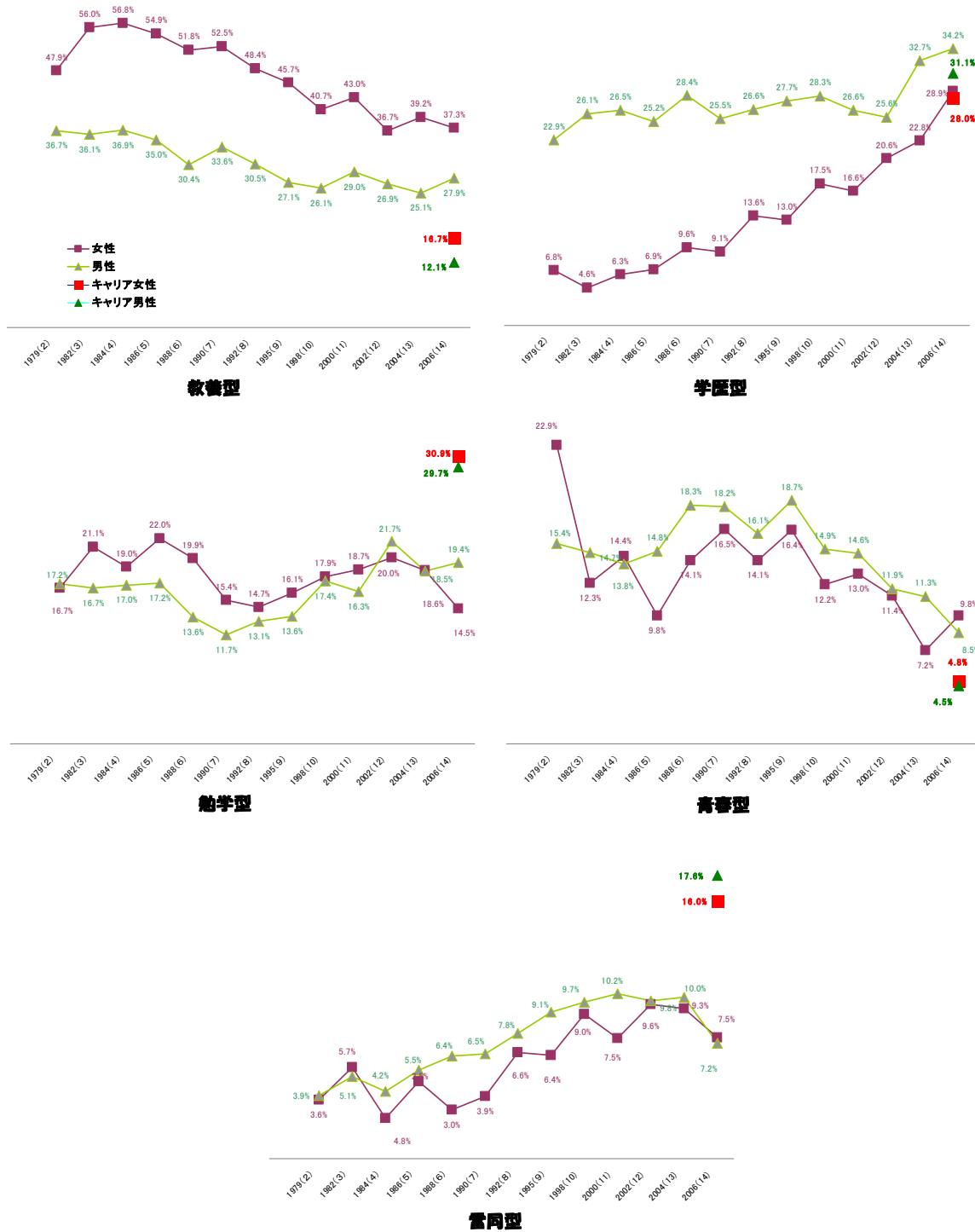


図4. 男女別の進学理由の推移

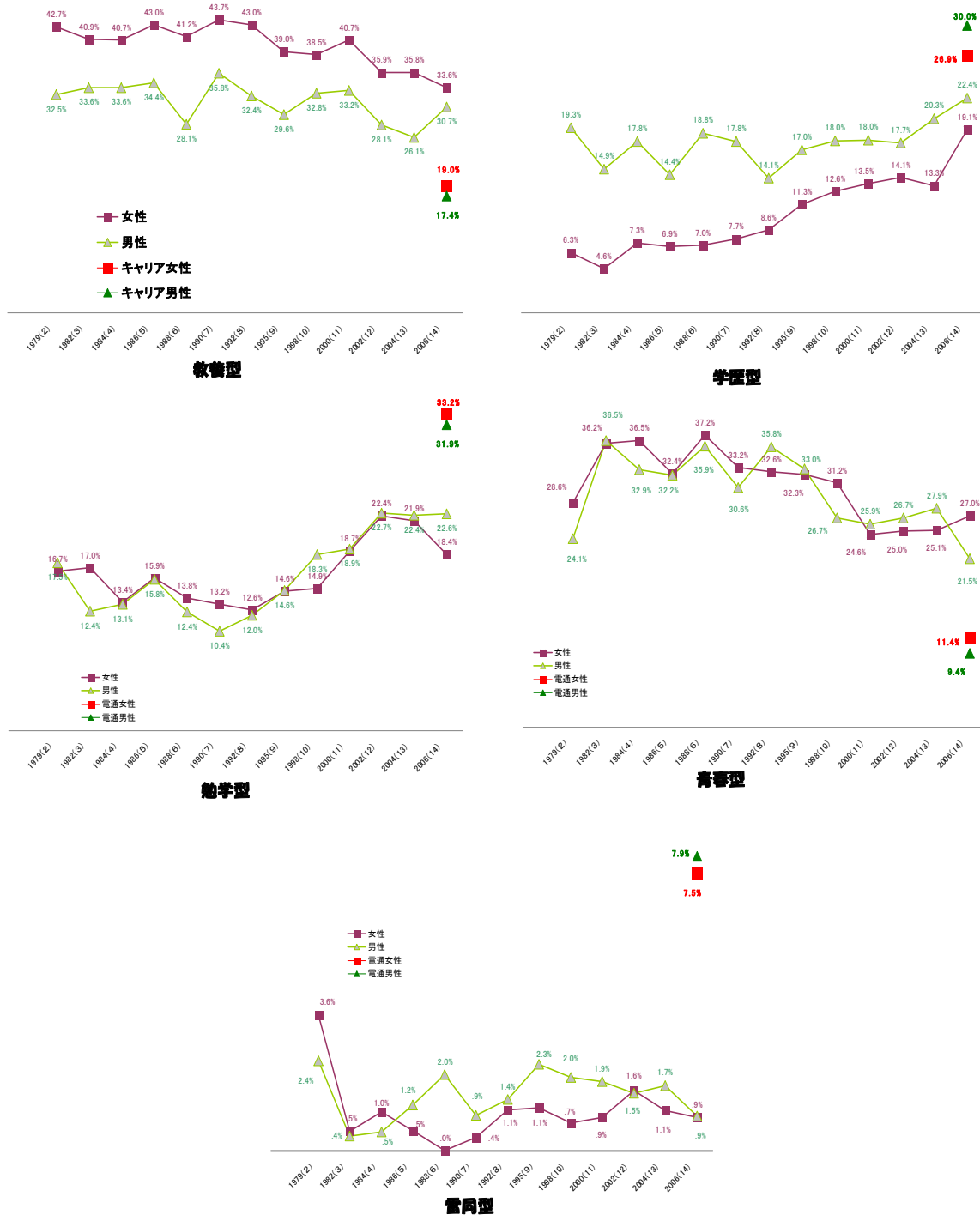


図5. 男女別の進学理由の推移

進学理由でみると、「教養型」では女性が、「学歴型」では男性がすべての調査回で選択率が高い。「教養型」の男女差は、第6回調査(1990年)の21.3ポイントをピークに以降小さくなってきており直近の第14回調査では9.4ポイントになっている。CCA14の1年後のキャリア調査では男女差は4.6ポイントとなっている。また、「学歴型」を見ると、男女差は第3回調査(1982年)の21.5ポイントをピークにその差が「教養型」より急速に小さくなってきており第14回調査ではその差は5.3、キャリア調査では3.0ポイントとなっている。「教養型」では、女性の選択率、男性の選択率ともに漸次減少しているのに対して、「学歴型」では、男性の選択率は第2回調査(1979)の22.9%から2002年の第12回調査の25.6%までおおよそ横ばいであり、一方女性の

選択率は調査回毎に高くなってきている。他の類型でも男女差は小さくなる傾向がみられ、キャリア調査では、「雷同型」以外、CCA14 に比べて差がより小さくなっている。5 つの類型すべてにおいて男女差は小さくなってきているが、CCA14 データ ( $\chi^2(4) = 12.67, p < .05$ )、キャリア調査 ( $\chi^2(4) = 10.11, p < .05$ ) とともに類型による選択率に男女差が有意に見られた。

在学理由では、「教養型」「学歴型」ともに進学理由と同じような傾向を示しているが、その男女差は進学理由ほど大きくない。また、調査回毎に男女差が小さくなっていく傾向も進学理由と同じだが両者の接近する傾きは進学理由より穏やかである。しかし CCA14 での男女差は、進学理由に見られるより小さくなっており、5 つの類型について統計的には有意な男女差はない。キャリア調査においても同様である。

以上のことから、進学理由・在学理由ともに女性は「教養や視野の拡大」「立派な人格形成」といった教養志向が男性よりも高く、男性では「就職に有利」「就職に必要な勉強をする」「将来の安定した生活」といった就職・安定生活志向が高いという事がいえる。特に進学理由に見られる女性の「学歴型」の選択率の上昇について考えると、80年代までの4年制大学への進学はむしろ就職には不利な状況を反映して10%未満の選択率にとどまっている。しかし、1990年以降の女性の「学歴型」における急増は1986年の雇用機会均等法改正や1990年以降の経済不況など、働く環境の変化に女性のほうが敏感に反応し、働く意識を変化させてきてるといえる。一方男性では、大学卒業者の就職率が55.1%で底を打ったといわれる2003年以降、「学歴型」に増加の傾向を見せている。

### 職業関連による特徴

進学理由・在学理由で見られたようなCCA調査とキャリア調査での類型の選択パターンの違いは、CCAデータとキャリアデータの学部構成の違いに大きく影響されていると考えられる。進学理由は、学部選択に関連しているだろうし、在学の理由についても学部のカリキュラム内容に大きく依存すると考えられるからである。

キャリア調査では、2013のサンプル数に対して大学名称では469、学部名称では296学部から成り、学部の名称が多様化していることがわかる。しかし296学部について度数の多い順に並べ替えると上位の23学部までは、文学部—文学士、経済学部—経済学士というように旧学位制度の学士称号への対応が可能であり、この23学部で全体の約7割をしめる。24番目以降の度数は12以下であり、学部名称のちょうど半分の148は度数1、データ構成比は約7%となっている。このように学部名称による分類はほとんど不可能である。よって、学部・学科の内容が理系か文系か、職業との関連度と進学・在学理由の特徴を見ていく。

学年毎の理系・文系の別と職業関連について**表3**に示す。

**表3. 学年毎の理系・文系の別と職業関連**

		F4職業との関連性					合計
		かなり関連	どちらかという関連	どちらでもない	どちらかという無関連	まったく関連無い	
1年生	どちらかといえば文系	121 (23.1%)	192 (36.7%)	135 (25.8%)	59 (11.3%)	16 (3.1%)	523 (52.9%)
	どちらかといえば理系	203 (52.6%)	145 (37.6%)	27 (7.0%)	10 (2.6%)	1 (.3%)	386 (39.1%)
	文系でもあり理系でもある	23 (29.1%)	33 (41.8%)	16 (20.3%)	5 (6.3%)	2 (2.5%)	79 (8.0%)
	合計	347 (35.1%)	370 (37.4%)	178 (18.0%)	74 (7.5%)	19 (1.9%)	988 (100.0%)
3年生	どちらかといえば文系	69 (12.5%)	173 (31.5%)	170 (30.9%)	107 (19.5%)	31 (5.6%)	550 (53.7%)
	どちらかといえば理系	213 (52.0%)	141 (34.4%)	47 (11.5%)	6 (1.5%)	3 (.7%)	410 (40.0%)
	文系でもあり理系でもある	20 (30.8%)	22 (33.8%)	15 (23.1%)	7 (10.8%)	1 (1.5%)	65 (6.3%)
	合計	302 (29.5%)	336 (32.8%)	232 (22.6%)	120 (11.7%)	35 (3.4%)	1025 (100.0%)

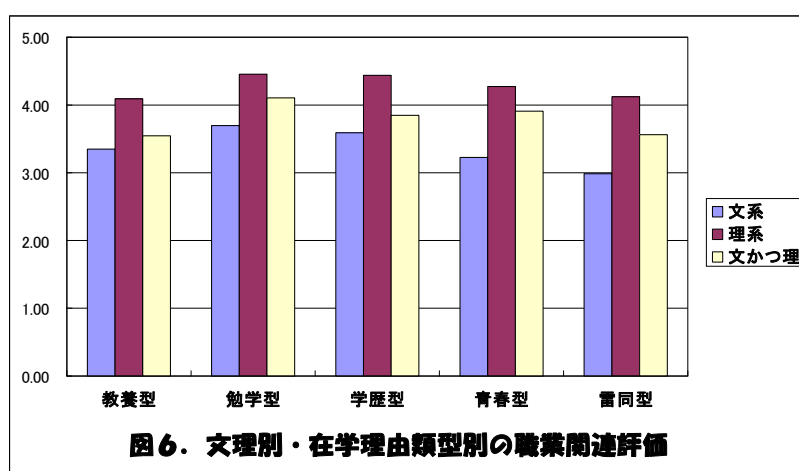
これを見ると文系が全体の約5割、理系が4割、文かつ理系1割という割合になっている。文系では「どちらかという関連 (34.0%)」「どちらでもない (28.4%)」「かなり関連(17.7%)」となっており、「関連あり」:「どちらでもないあるいは関連無い」で、ほぼ5:5となっている。理系では「かなり関連 (52.3%)」、「どちらかという関連(35.9%)」の順で「関連あり」の合計でほぼ9割となっている。文系かつ理系については、「どちらかという関連 (38.2%)」「かなり関連 (29.9%)」の順で「関連あり」の計でほぼ7割と理系と文系の間といった特徴を示している。全体では「どちらかという関連 (35.1%)」「かなり関連 (32.2%)」「どちらでもあるいは無関連 (32.7%)」となっている。

これらを原データで見ると、職業関連が強いという回答では、文系では教育・福祉などの専門職関係、音楽・芸術などの特殊な専門系、残りの多くを経済・経営、法学部などが占める。理系では工学系が一番多く次いで、医科・歯科・薬学、看護・福祉・医療、家政関係などの専門職系、文系かつ理系では教育、看護・医療、医学などであった。逆に「全く関連ない」という回答では、文系で43、理系で4、理かつ文では3であり、理系では工学部・電気電子工学科、獣医学部・動物学科、文理学部・数理学科、理工学部・機械工学科であり、文理学部以外の3つの学部学科は実学分野の様に見える、文系に関して数の多い文学部、経済学部、法学部、商学部に関して同じような学科名称において職業関連度についての回答は様々で、回答者の職業に対する考えが所属学部で学ぶ内容と職業との関連意識に関与していると思われる。実際、文系・理系の分布に学年差は見られないが、職業関連に関しては学年差が有意であり ( $\chi^2(4) = 23.46, p < .01$ )、1年生の職業関連が70.9%あるのに対して、3年生では60.9%と1年生の方が学部の内容を職業に関連していると評価している率が高い。キャリア調査の時期は11月と3年生にとっては実際の就職活動を意識し活動を始めている時期であることからより職業・職種の現実から大学での学びの内容と職業について現実的な判断を下していると考えられる。

文系・理系の別に学年差が見られないので、学年を一緒にして文理の別とそれぞれの在学理由・進学理由の類型をしてみる。文系では、進学理由が「学歴型 (28.5%)」「勉学型 (25.1%)」「雷同

型（20.5%）」の順であるのに対して、在学理由では、「学歴型（29.2%）」「教養型（24.1%）」「勉学型（23.7%）」と「教養型」が進学理由での4位から2位へと、また「雷同型」では3位から5位へと順位を入れ替えている。一方理系では、進学理由が「勉学型（39.7%）」「学歴型（33.6%）」「雷同型（14.8%）」、在学理由が「勉学型（46.0%）」「学歴型（29.6%）」「教養型（11.1%）」と、文系では入学後に勉学志向がやや少なくなるのと対照的に、理系では勉学志向がより多くなっている。また、文かつ理では、進学理由「勉学型・学歴型（35.5%）」「雷同型（14.8%）」、在学理由では「勉学型（35.7%）」「学歴型（29.3%）」「教養型（20.7%）」と文系と理系の間隔的な特徴を示している。文系では進学理由で「雷同型」の選択率の高さが目につき、文系学生の5人に1人が志向性を持たないまま大学に進学し、10人に1人が「何となく」在学していることになる。

それでは、文理の別と在学理由の類型、職業関連との関係を見るために職業関連の評価を「かなり関連している」～「全く関連無い」を5～1点とし、文理の別（3）×在学理由（5）それぞれの平均を図6に示す。



これらについて2元配置の分散分析を行ったところ、両方の主効は有意であったが交互作用は見られなかった。つまり、それぞれのグループによる職業関連の評価は、理系（4.37）>文かつ理（3.86）>文（3.45）、「勉学型（4.13）」>「学歴型（3.95）」>「教養型（3.54）」「青春型（3.54）」「雷同型（3.39）」となっている。つまり、同じ在学理由類型でも理系、文かつ理、文系の順で職業関連評価が高く、なおかつ文理の別にかかわらず「勉学型」、「学歴型」が「教養型」「青春型」「雷同型」より職業関連評価が高い。文理の別の差は所属する学部による職業関連度の差を示すが、在学理由類型による差は同じような学部にも所属していても本人が現在、何を重視しているかによって職業関連評価が異なることを示している。

こうしてみると、CCA調査の母体である関西学院大学は、神学部、文学部、社会学部、法学部、経済学部、商学部、理工学部、総合政策学部の8学部で構成されている。一番新しい総合政策学部は1995年に開設された学際的な学部であり、理工学部は2002年までは物理、化学、生物の3学科構成であったものに情報科学科を加え理工学部へ改組したもので工学部的要素は少なく、総合政策学部を除いた旧7学部の内容はほとんど学部名が旧学士称号に準ずるリベラルアーツ系の学部といえる。この中で、職業関連で考えると比較的「勉学型」が多い理工学部の全体構成比は7%程度であり、さらにその中で、専門性を職業へ関連づけていると考えられる大学院進学者の率は54%（2007年度実績）と学部内の比率は高いが、大学全体の構成としては4%未満にす

ぎない。他の学部については 2007 年度の業種別の就職状況から見るとおそらく専門職種と思われる医療・福祉・教育などへの就職者は卒業生の 4.5%程度で、多くは金融・保険、製造業、卸売り・小売りといった業種が占め、これらの中で学部の専門性をどれくらい生かせる職種なのかは不明である。つまり、他の 7 学部では、将来的な展望を持ち職業へ関連づけて勉強している学生はおそらく、「勉学型」や「学歴型」に属すると考えられるが、結果としては今を楽しむ「青春型」が多い。

### 大学で習得する知識・技能・態度（授業と授業外）と在学理由

さて、Q4 では「あなたの大学生活において下記の 25 項目の能力や事柄がどの程度身につきましたか」とたずね、「1.『大学で経験した授業（予習復習など授業外での学習を含む）』と「2.『授業外の活動（クラブ・サークル、アルバイト、自主勉強、読書など）』に分けて 1 つずつお知らせ下さい。とし 25 の項目に「かなり身についた」「まあまあ身についた」「あまり身につかなかった」「全く身につかなかった」の 4 件法で答えてもらうものである。これらを 4～1 点に点数化し、それぞれの項目について 1 年生と 3 年生の別と授業・授業外についての平均を図 7 に示す。

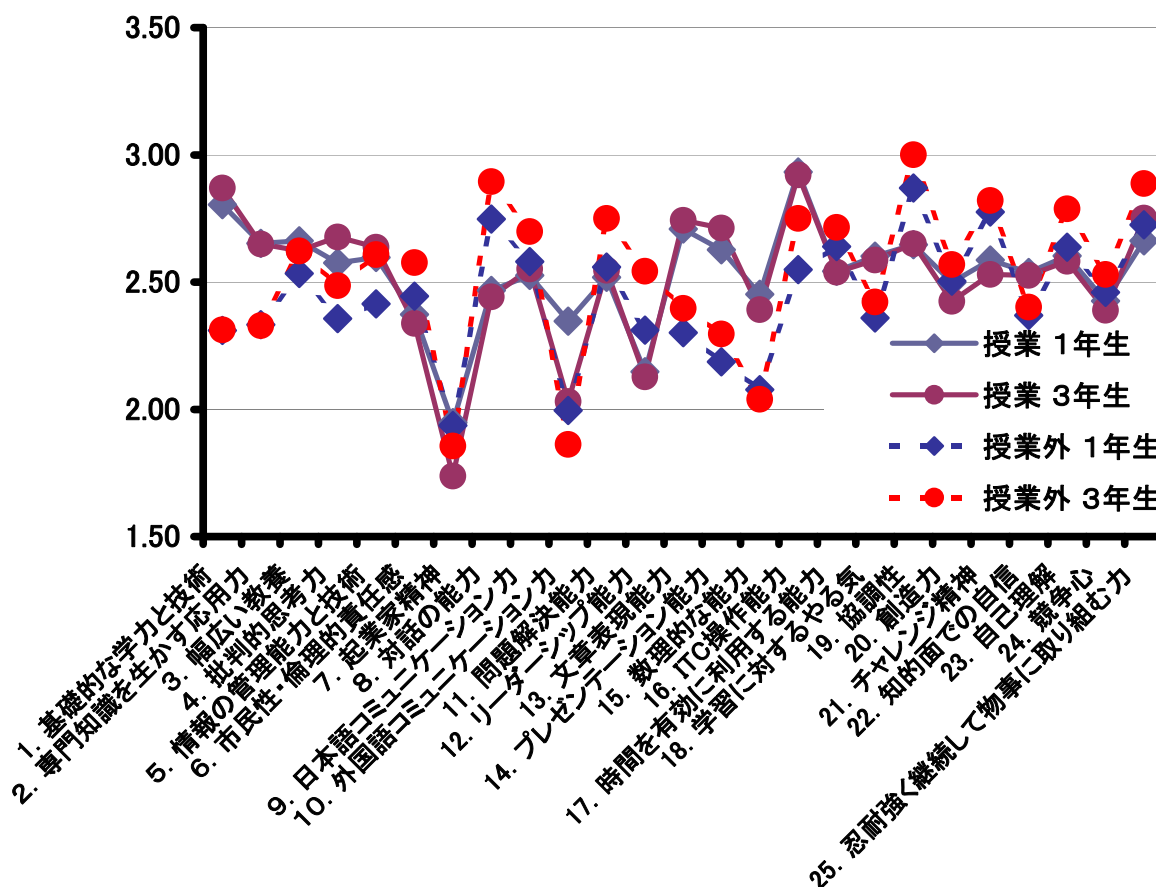


図 7. 大学で習得する知識・技能・態度（授業と授業外）

これを見ると、授業で身についたという評価が授業外より 1・3 年生ともに高いのは「1. 基礎的な学力と技術」「2. 専門的知識を生かす応用力」「4. 批判的思考力」「13. 文章表現力」「14. プレゼンテーション能力」「15. 数理的な能力」「16. ITC操作能力」の 7 項目、授業外評価の方が高いのは「8. 対話の能力」「12. リーダーシップ能力」「19. 協調性」「21. チャレンジ精

神」の4項目となっている。

授業・授業外での学年差を比べるための25項目毎にt検定を行ったところ、「授業で習得」について3年生の方が評価が有意に高かったものは、「1. 基礎的な学力と技術」「4. 批判的思考力」「14. プレゼンテーション能力」「25. 忍耐強く継続して物事に取り組む力」の4項目で、逆に1年生の方が評価が高かったのは、「7. 起業家精神」「10. 外国語コミュニケーション力」「20. 創造力」の3項目であった。「授業外で習得」の評価では、25項目中、学年差が見られなかったのは「1. 基礎的な学力と技術」「2. 専門的知識を生かす応用力」「15. 数理的な能力」「17. 時間を有効に利用する能力」「18. 学習に対するやる気」「20. 創造力」「21. チャレンジ精神」「22. 知的面での自信」の8項目、1年生が3年生より評価点が高かったのは、「7. 起業家精神」「10. 外国語コミュニケーション能力」の2項目で残りはすべて3年生の評価が有意に高かった。「授業で習得」の評価は学年差が見られる項目が少なく、「授業外で習得」では、多くの項目で3年生が1年生より習得評価が高く、在学期間の長さが習得評価に影響している。

それでは、現在の大学在学に対する態度と習得評価とはどのような関係にあるのだろうか。これら25項目の習得評価を在学理由の類型毎に示したものが**図8a・b**である。

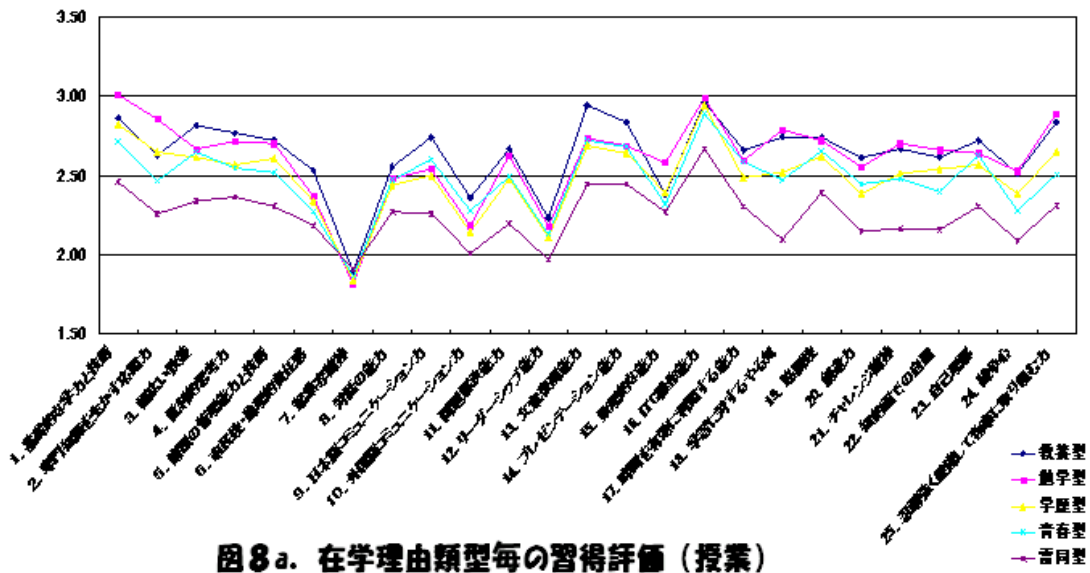


図8a. 在学理由類型毎の習得評価（授業）

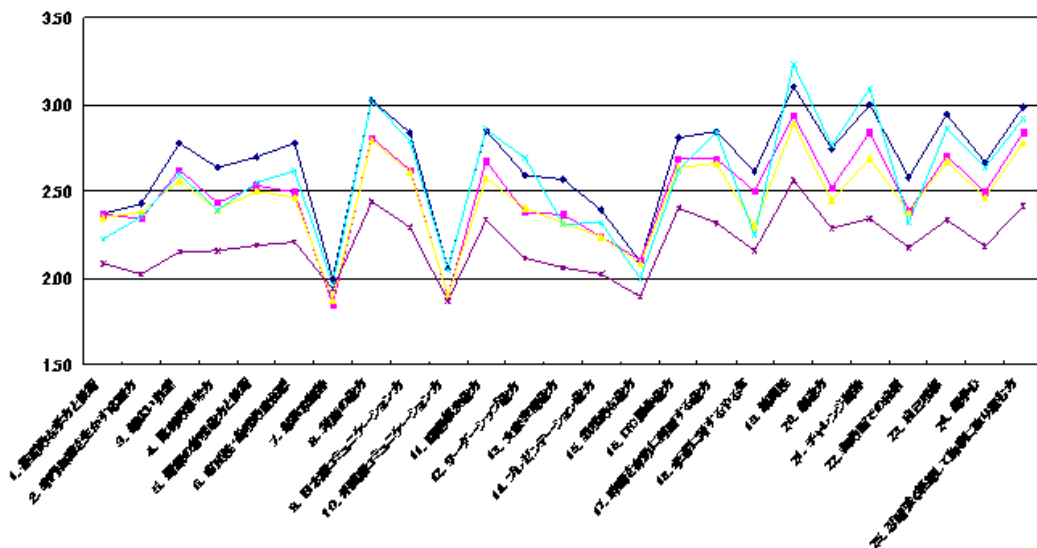


図8b. 在学理由類型毎の習得評価（授業外）

「授業で習得」に関して見ると、「専門知識・技術の修得」「学問研究」を重視する「勉学型」が全体的に高いと予測したが、「勉学型」が他の4類型より目立って高いのは、「1. 基礎的な学力と技術」「2. 専門知識を生かす応用力」の2項目のみであった。むしろ「教養や視野の拡大」「立派な人格形成」を重視する「教養型」が、「3. 専門外にわたる幅広い教養」「6. 市民性と倫理的責任感」「9. 日本語コミュニケーション能力」「13. 文章表現能力」「14. プレゼンテーション能力」の5項目で他の4類型より目立って高く、「11. 問題解決能力」「18. 学習に対するやる気」「21. チャレンジ精神」「25. 忍耐強く継続して物事に取り組む力」の5項目では「勉学型」と並んで他の3類型より評価が高くなっている。

「授業外で習得」に関してみると、「青春を楽しむ」「課外活動にはげむ」を重視する「青春型」の評価が高いと予想できる。しかし、ここでも「教養型」が「3. 専門外にわたる幅広い教養」「4. 分析を通しての批判的思考力」「5. 情報の管理能力と技術」「6. 市民性と倫理的責任感」「13. 文章表現能力」の5項目で他の類型より評価が高く、「8. 対話の能力」「9. 日本語コミュニケーション能力」「12. リーダーシップ能力」「17. 時間を有効に利用する能力」「19. 他人との協調性」「20. 創造性」「21. チャレンジ精神」「23. 自己理解」の8項目では「青春型」と並んで評価が高い。

「授業」での習得評価では、「勉学型」より「教養型」が他の類型に比べて評価得点が高い項目が3項目多く、また、「授業外」での習得評価においても「青春型」より評価得点が高い項目が多かった。「教養型」の重視する「教養や視野の拡大」「立派な人格形成」というのは一見ぼんやりした目的の様に思えるが、むしろ偏りなく、いろいろなものから学ぼうとする態度が授業に限らず大学生活の様々な場面でこれらの知識・技能・態度に関する要素を見いだしているのかもしれない。

### 学生生活の充実度と在学理由

Q8では「あなたの学生生活は充実していますか」とたずね「充実している」「まあまあ充実している」「どちらとも言えない」「あまり充実していない」「充実していない」の5件から答えるものである。この学生生活の充実度に関してもCCA調査で第1回から採用されているが、選択肢が「非常に充実」から「全然充実していない」の5段階とキャリア調査とは表現がやや異なる。谷田(2005)は、この充実度を大学生活の総合的評価指標とし第1回から第13回調査までのデータを用いて継続されてきた他の項目との共変関係について分析を行っている。ここでキャリア調査と共通している属性についての結果を要約すると、クラブ・サークルなどの団体に所属している群はそうでない群よりすべての調査回を通じて充実度が高い。また、性別では、第3回調査(1982年)以降男性より女性の方が充実度が高く、学年別では第11回調査(2000年)までは学年が高いほど充実度が高い傾向が見いだせたが第12回調査以降学年差は見られなくなっている。また、CCA調査の継続項目に「有用度評定」がある。これは、「この大学であなたの人生の一時期を過ごす事は、あなたの将来にとってどれくらい役立つと思いますか」とたずね、「大いに役立つ」から「ほとんど役に立たないだろう」までの5件法で回答してもらうものである。この有用度については、充実度が高いほど有用度評定も高いという結果が得られている。キャリア調査では、職業関連評価が現在の学部の内容が将来の職業に関連しているという認知を示すものであると仮定すると、この項目でCCA調査の有用度と同じような結果が得られるだろうか。

性別、学年別、職業関連度別の3つの属性について、それぞれ在学理由類型と組み合わせた2元配置の分散分析を行った。3つすべての組み合わせでそれぞれの主効果が得られたが交互作用



はなかった。性別では女性(3.86) > 男性(3.69)、学年別では1年生(3.83) > 3年生(3.72)となった。職業関連では主効果が5%水準で有意であったが、下位検定の結果有意水準に達する組み合わせはなかった。これら3つの属性との組み合わせで、在学理由類型の主効果は頑強であり、3つの組み合わせ全てで、「雷同型」 < 「学歴型」 < 「教養型」「勉学型」「青春型」という結果が得られた。

現在何を重視して在学しているかという学生の構えが学生生活の充実度の評価に関しても影響しており、ここでは在学している理由について、「教養や視野の拡大」「立派な人格形成」「専門知識・技術の修得」「学問研究」「青春を楽しむ」「課外活動にはげむ」といった内発的な動機付けの学生の充実度に差はなく他の2類型群より充実度が高い。一方、「就職に有利」「就職に必要な勉強をする」「将来の安定した生活」というように将来の就職のために今がんばる型の学生の充実度は先の3群より低く、「特に理由はない」と漠然と在学している学生群の充実度は他の4群より有意に低い。この結果から、職業関連はむしろ充実度にはマイナスであり、将来の職業への関連評価は必ずしもCCA調査の「有用度評定」と同じ効果は得られなかった。

さて、近年大学教育についてその効果の検証が求められている。しかし、大学のカリキュラム内容は学部名称、学科名称一つをとっても多様化しており共通の定量的な評価は難しい。また単なる知識の量や技能を定量的に測っても、それらの知識・技能をどのように現実世界の複雑な問題解決へ適用していけるのかといった問題解決能力やその過程としての論理的思考能力など高等教育の高等教育たる成果を測る事は難しい。さらに卒業後の彼等のライフに大学教育がどのような効果を持つのかといった継続的な効果の視点からの評価も必要だろう。

近年、それぞれの大学や研究ベースで大学教育を評価するための試みが始められているが、これらのほとんどがこのキャリア調査のQ4で見えるように、様々な知識や技能・態度に関する項目についてどのくらい身についたかと問う主観的評価を用いている。しかし、本報告で示されているように教育を受ける学生の側にはそれぞれ異なる在学理由、つまり個々の大学生活で何を重視しているかという構えが存在している。それらによってそれぞれの学生が大学における活動のどの側面によりコミットメントしているかが異なる事はごく当然である。Q4では、「授業で習得した」とする評価では「学歴型」が高く、「授業外で習得した」という評価では「青春型」が高く、重視する項目により高い評価をするという予測通りの結果が示された。しかし、予測外に「教養型」がこれら2つの類型より授業・授業外ともに習得評価が高いという結果も示された。つまり「教養や視野の拡大」という在学理由は、大学でのさまざまな経験を通して自己を成長させていこうという態度の表れと解釈できる。また学生生活の充実度は総合的な満足度指標と考えられるが、これについても在学理由類型の効果が強く見られた。このような主観的評価については、個人の構えや特性を考慮に入れる必要があり、とくに教育評価を考える際には学部や学科の構成によって分布の異なるこれらの特性効果を省いて比較する事が重要であろう。

これらの特性で特に「雷同型」については注意を向ける必要があろう。本報告で示されるように、この類型に属する群は、充実度は他の4群より有意に低く、習得評価に関してもほとんど全ての項目で目立って評価が低い。また、CCA調査においては心理的不適応得点が高いなど大学生生活の諸側面の評価に関しては他の類型群よりネガティブな評価を示す。CCA調査もキャリア調査もボランティア回答である事から、自主的に事に当たる事の少ない「雷同型」の学生はこれら2つの調査で見えているより遙かに実数が多い事が予測される。たとえ同じ項目に関して、同一の

大学内で集めたデータでも、ボランティア回答による調査と授業中などに強制的に全員に回答してもらった方式で集めた結果では比較する際に注意が必要だろう。とくに大学間の比較に関しては、むしろ偏差値の高い大学ほど「雷同型」の率は高いと予想される。武内（1998）は、国立大学より私立大学の方が、またより偏差値の高い大学の方が親の学歴によるリピテーション率が高い事を示している。偏差値だけで見ても、偏差値が高い大学へ進学する学生ほどいわゆる進学校出身である率が高い。つまり、進学校といわれる高等学校の大学への進学率はほぼ 100 パーセントであり、こうしてみると進学校のローカルな進学率は日本の高等学校への進学率とほぼ同じである。さらに、偏差値の高い私学は都市部に集中しておりこれらの私学へ進学してくる学生は早ければ、附属小学校や中学、あるいは私立の小中学校といった義務教育段階から私学で教育を受けるものも少なくない。そこでは、似たような社会経済的背景を持つものの集まりであり、早い時期から「大学へ行くのがあたりまえ」の環境におかれているといえる。また、親や兄弟、親類が大学卒の率が高いであろうし、「大学卒で当然」という意識を持っている者も多いだろう。実際 CCA 調査の進学理由の回答への「その他」の記述には「義務教育の延長」「あたりまえだから」といった記述がみられる。このような環境では、「親や先生の薦め」「特に理由はない」「皆が行くから」といった「雷同型」の進学理由の率が高く、これらのなかで大学へ在学している事に特にこれといった理由をみつけられず「雷同型」にとどまる学生も多いと予想できる。

つまり、大学間で教育評価を比較する際にこれらの学生の要因を考慮に入れずに比較を行うと、これらのネガティブ評価の要因となる学生の比率の効果を相殺しなければ本来ある教育効果を見損なう事になる。大学での学びは、知識を蓄えたり、技能を身につけるだけでは成り立たずそれらを自分の中で再構成する必要がある、これは自発的な学びが無い限り身につかない。これら「何となく」在学している学生へ、学びの方向性をもたせる働きかけのためのプログラム開発のためにも、「雷同型」学生の実態や特徴を明らかにする事が必要であろう。本報告で「教養型」の習得評価が授業・授業外とも高かった事から、目的にこだわって学びの機会を減らしてしまうより、広く学ぶ事に導く方が教育的効果が上がる事が予想される。